

西大寺会陽に参加して

県教育庁 教育次長

内 田 広 之



例年二月、西大寺・観音院で行われる日本三大奇祭の一つ、会陽えまうが今年三月、国の重要無形民俗文化財に指定された。裸祭りは全国にいくつか残るが、約五百年も原形をとどめ継承されるのは価値が顕著だそう。

こうした価値ある文化芸術資源には、人々の結束を強める力がある。最近の例では、東日本大震災後の宮城県女川町で、伝統行事の虎舞を通じて人々の結束が強かった地区の高台移転への合意形成が迅速に進んだ。

地方創生を進めようとの流れのなか、人口増加を第一目標に掲げる自治体は多いが、それと同時に人々の結束も強めなければ、大都市部のように人間関係の希薄な社会を作るだけとなる。江戸時代の国内人口は、現在の三分の一以下だったが、政治・経済・文化において発展を遂げた藩が多かった。産業や情報通信技術が今とは異なるため、一概に現代との単純比較はできないが、当時の人々の結束力が地方の賑わい創出の源にもなっていたのだと思う。

今年、会陽に初参加した。大きなかけ声で寒さを吹き飛ばしながらの入場、やぶれかぶれでの冷水突入を経て、最高潮の宝木争奪戦しんぎでは、熱気充満で寒さどころではなかった。

一緒に参加した教育庁の同僚とはぐれてしまいうハプニングもあった。日常では到底できない数々の体験を通じて同僚と結束を強め、また、地域の皆様からは、心のこもった炊き出しを頂きながら、新たな交流もできた。

地方創生に向けては、人口増加も大切だが、それと同時に、こうした伝統行事を盛り上げ、人と人との結束を強める仕掛けづくりも重要だと、会陽に参加して実感した。

文化庁勤務時、国の文化振興計画策定の執筆に従事した。約二十万から四十万人の外国人が訪日するとされる二〇二〇年東京五輪に向け、全国的に文化芸術資源を発信しようという計画だが、こうした好機に、本県に数ある文化財の魅力を発信し、人と人をつなぐ力を県内津々浦々で創りだしていきたい。